

川と遺跡

平成 **16** 年度河川文化講演会

講師 高島成侑 八戸工業大学教授

- 期日 平成 16 年 12 月 12 日(日)
- 時間 午後 3 時～午後 5 時
- 場所 八戸市公会堂講義室
- 主催 あおもりの川を愛する会

建築は地域史のうちに



高島 成侑(たかしま せいゆう)

職 名:教 授

学 位:工学修士

所属(部門・研究室等):建築工学科

出 身 大 学:東北大学大学院

出 身 地:青森県八戸市

専 門 分 野:日本建築史、考古建築史

所 属 学 会:日本建築学会、日本民族建築学会、
建築史学会、日本考古学協会

教育研究テーマ

1.中世掘立柱建築物跡から見る建築構造

発掘調査で検出される中世掘立柱建物跡から、その構造の仕組と架構法を推測している。

2.縄文時代の造営尺について

「縄文尺」が用いられていたものと用いられていないものとの区別をしたい。

著書・論文等

近世社寺建築 (県教委) / 近代化遺産総合調査(県教委)
/ 三内丸山遺跡(県史別編)、他

学外委員等.

三内丸山遺跡発掘調査委員 / 県史企画編集委員 / 他

講演・出前講義

検出された建築跡について

受託研究・プロジェクト参加等の実績

三内丸山遺跡復元建物点検調査(県土木部)

挨拶

あおもりの川を愛する会会長 佐々木幹夫
(八戸工業大学教授)

主催者を代表し、今日の河川文化講演会開催にあたり一言挨拶をしたいと思います。あおもりの川を愛する会は3つの目標をもって毎年いろいろな事業に取り組んでおります。まず我々が川を知らなければいけない。ということで川を見ましようということを会の活動の一つの目的にしています。2つ目の活動の目的は、自分が生徒になったり、先生になったり、皆で一緒に川に行ってみたり感じたり調べたりして、自分で知り得た情報を皆さんに発信するということです。3つ目が河川文化の発展に寄与することです。あおもりの川を愛する会はこの3つの目的をもって活動しています。

あおもりの川を愛する会の会員は現在300名おります。青森県全体の川を良くしたいということで、いろいろな市町村の方々、市民の皆さんが参加をしてくれております。会費は、青森の川を愛する会の活動だけに参加する場合には年会費1000円、青森の川を愛する会というのは、日本河川協会さんの指導でできたという背景があるもので、日本河川協会の会員になる場合には5000円自動的に払い込みます。日本河川協会のほうから青森の川を愛する会のほうに、5000円払ったうちの何割か、いろいろな活動費として返ってきます。そういう切っても切れない縁がありまして、互いに連携をとりながら活動しております。それで青森の川を愛する会というのは、先程もいったように青森県の全体の川を対象に小さくても大きくてもいいからできる範囲で活動をしています。ただ余りにも会員が多すぎるので、とりあえず馬淵川とか奥入瀬川、岩木川、堤川そういうところでグループを作って、そのグループは毎年活動をしています。会場の後ろのほうに置きましたが、展示しているのは昨年奥入瀬川で開いたワークショップの内容です。子供さんたちや母親の皆さんにきてもらって、川に直接行ってもらって川をくだってもらって、川をどうしたらいいだろうといろいろな事を親子で話し合ったという行事です。今日この話題を出したのは、9部ぐらいあったので持ってまいりましたので、お持ちください。

今日の講師の高島先生について、お話したいと思います。詳しくはレジメに書いております。高嶋成侑先生は八戸工業大学建築工学科の教授であり、専門分野は日本建築史と考古建築史で、その道の専門家です。今日は三内丸山遺跡の話もあるかと思いますが、あの建物跡の再生図面を書いたのも高島先生です。なにかいろいろなことで聞きたいことがありますら、質問の時間を設けておりますので、手を上げて質問していただきたいと思います。簡単ですが高島先生の紹介をさせていただきました。

今日の高島先生のお話も、本にする予定です。高島先生はたくさん資料を持っていますから、本はかなり厚くなるものと思っております。今日話せなかった内容も入れてもらって、ハードカバーで出版する予定です。たぶん1年半ぐらいかかると思いますが、事務局の方に連絡していただければ詳しいことが分ると思います。

これで主催者としての私の挨拶を終わります。では高島先生よろしくお願いいたします。

皆さんこんにちは。ただ今ご紹介いただきました八戸工業大学の建築工学科におりまして、建築歴史研究室を担当しております高島といいます。

建築歴史といってもいろいろあるわけですが、この青森では、やってきたら何でもやらなければなりませんし、なんでもやってまいりました。それらのなかでも、遺跡の発掘調査で検出されてくる建物跡を復元研究というのが、私がもっとも専門としているところがあります。

時代はいつでも縄文時代からと、今お話ありました中世ぐらいまでかけていろいろな時代の建物跡をみて、調べて、それはいつの建物か、どんな建物だったのか、というようなことをやっております。発掘調査の現場で分からない建物跡が出てくると、その現場に呼ばれるわけです。現場を走り回って調べまして、あとで大学に帰ってから調べてという訳にはいかないです。現場の仕事というのはその現場である程度の答えを出さないといけない。そこが一番難しいところと思いますが、現場でいろいろとやって、遺跡ばかり眺めてきたわけでございます。報告書などにはあちこちと書かせていただいておりますけれども、ろくなのは無いということで、今までなにをやってきたかということになります。そういう私のお話を聞いていただければと思います。

実は、昨日「北陸の中世考古学会」というのが富山県でありまして、中世の建物跡で北陸のものが気になっておりまして、研究発表などを聞いて、すごく面白く参加しまして、今朝早くにそこを飛び出しまして、さっき着いたばかりです。ちょっと疲れたかなという感じですが、この講演を楽しみにしていたものですから、「川と遺跡」という題目でお話させていただきます。

先程お話ありましたが、今年の3月に「青森の川を愛する会」で「川につながる縄文遺跡」というテーマで、青森で、話をさせてもらっております。新潟の青田遺跡で見てきたこととか、三内丸山遺跡の設計に関わることなど、そういうものを取り上げて、今見られる遺跡とか遺物の話から、川が持っていた機能というものをどう思うかというのを話させてもらいました。

本日はもう少し視野を広げまして、世界の中で、川と遺跡というものがどうゆうふうにつながっているのかというあたりから、先程、佐々木先生のお話にありました中世までは今日はちょっとゆきませんが、世界の中で、私がみた限り、こういうところでは川がこういう大事な役割をしていたということを紹介してみたいのです。それから日本の新潟の青田遺跡であるとか富山の桜町遺跡であるとかご紹介していきたいと思います。

「世界の川と遺跡」というテーマでお話をさせていただきます。よろしく願いいたします。

「世界の川と遺跡」

世界の4大文明というのは、ご存知のように中国、インド、メソポタミア、エジプト、すべて川の流域なのです。

中国では黄河が有名ですが、最近では長江でも古い遺跡がいろいろと見つかっておりま

して、もう一つ別な文明が有るのではないかとわれています。インドではインダス川の流域、メソポタミアではチグリス川とユーフラテス川の流域というのが、私たち小さいころから教わってのところですよ。エジプトもナイル川という、これをなくしては語れないというのがあるわけです。その中で最近私が行った所を紹介したいと思います。

黄河の流域では、最近行った所で感激したのは、敦煌の莫高窟です(写真 1)。これは敦煌というオアシス都市の近郊で、岩山に彫られら石窟寺院なのです。古いので 366 年ごろから、ちょこちょこ掘られていって、唐の時代を過ぎて、次ぎの時代になるまで、石窟寺院が掘りつづけられたなところでした。



写真 1

これが、莫高窟の入り口を脇のほうから見た、ちょうど私がいった時に川が干上がっていて、川の中を車が通れる環境だったのですが、敦煌の古い遺跡をこんなふうに見てきた。すごいところにすごいものを作るものだなという印象があります。

半坡遺跡というのは黄河の流域になりますか、支流になりますか、滻河というところの東岸で見つかっています。5000 年前ぐらいの遺跡なのですが、西安の東の黄河です。そこにあります方形の竪穴住居跡、四角い竪穴住居跡、丸い竪穴住居跡、こういうのが日本の遺跡でも縄文時代を通じて、四角いものもあれば、丸いものもあるのですけれども、こういう(写真 2)土の壁をグーと屋根まで持ち上げて造っていた。上の方が四角い竪穴、こっち側に写っているのが丸い竪穴住居です。どちらも土を練り上げて壁にして盛り上げていった。これはすごく珍しいものです。こういうこともやっていたのかなというような感じで見てきたのを思います。



写真 2

こういう石器です(写真 3)。日本の石器よりこういう刃の形がはっきりしていて、現代のものにも通じるようなものを感じました。しっかりとした砥石が見つかりました。石器を研ぐもので、日本の遺跡では砥石というのは、ほんと数えるほどしか出ておりません。それに比べると中国では、あとで言いますが、長江のところで見つかった河姆渡遺跡なんかでも砥石はすごいのが出ています。こういう人面なのか、魚なのか分からないような模様を書いた土器なども一緒に出ていたよ、という半坡遺跡です。すごい所を見てきました。



写真 3

長江の流域に行きますと河姆渡遺跡というのが有名です。今年、八戸の人たちも東奥日報で旅行者を募って行ったのを新聞でちょっとみております。河姆渡遺跡というのはいつ頃の遺跡なのかという時代によって違います。古い本ほど古く書いておりますが、8000年前とか書いている本もありますし、6000年ぐらいだという本もございます。ここでは7,000年前ということにしておかせてください。よく分からないところです。

遺跡をずっとみて歩いて私が一番感激したのは、木材加工の技術がすごく発達していたということです。石器なので、鉄は無いようで、石器なのですが、先程、半坡遺跡でも言いましたように、刃の付け方、また砥石というのがすごく揃っておりまして、今回写真では大きい刃物の石器しか持ってきておりませんが、ほんとに細かいこのぐらいの石器ぐらいまで揃っていて、それにあう砥石がきちんと隣に展示してあったのを見まして（写真4）、現在でも通じるのではないかという感じでじっくりと眺めて来たことを思い出しております。



写真 4

河姆渡遺跡の門（写真5）みたいな正式なものです。ここに船をつけてあがっていくわけです。こっち側にこういうのがあって、奥が博物館などもこの奥にあります。それから、これはですね、河姆渡遺跡というところこういう写真が出てくるのですが、ずっと残っているわけです。柱が立てられたままこういう感じで残っているわけです。これが河姆渡遺跡という目にするような写真でもうしわけありませんが、（写真6）こういうのが河姆渡遺跡の現状だけとはいえないというのがあります。



写真 5



写真 6



写真 7

今日一枚だけですが、この木材の加工の仕方（写真7）なんかみてもらうとすごいものだなというのが分っていただけるかと思います。きちんと掘り込んで、こちら側から刺さる仕口だろうとは思いますが、ここで造られておりました。

これは石器の刃ものですが、ここに刃がついております。すごい形をしておりまして大きな木を切ったり何かを切ったりするときに、日本で言えば大きな鉞のようなものを想定

させるような道具でした。写真4に戻ります、この辺の刃先をみていただければ、すごいと思われるかもしれません。こういうのが河姆渡遺跡で累々と出てくるのです。皆さんの頭に入れておいていただきたいと思います。



写真 8

これが河姆渡遺跡で建築されておりました住居跡ひとつです（写真 8）。半分作りかけのところもわざとこんなふうにしてですね、こっちは茅葺の切妻造で、杭が立っていて、高床のものになっていて、すごいものだと思いました。廻りにいろいろな仕事をしている人形がありまして、楽しい場面もありました。こういうのが中国の河姆渡遺跡というところです。

それから長江を河姆渡遺跡よりもしばらく登っていきますと、良渚文明といわれる元となった良渚遺跡というのがございまして、これは 6000 年前ぐらいの遺跡だよという話でした。こちらは良渚遺跡の博物館です。



写真 9

これが、弘前大学におられた村越先生と一緒にいったときの写真で（写真 9）、村越先生がここに写っておられて、これは良渚の集落の復元模型を写真にとってきたものです。ここも相当古いのが、長江の流域にはあります。長江の上流域には三星堆遺跡というのがありまして、青森県なんかで展示会などなされているようですが、私はそこには行っていませんが、やはり 5 大文明なり古代文明なるのかともいわれております。

ナイル川にも行ったのですが（写真 10）、ナイル川のそばにあります神殿（写真 11）を見ますと、多柱室という柱がいっぱい立っているような部屋がございます。



写真 10



写真 11

この辺を見ると、さすがかなと思ったりしました。ナイル川は広い川で、夏場だったので

すが、こういう柱（写真 12）がズラーと建っている部屋が必ず神殿の所にあるわけで、



写真 12

カルナック神殿にも行きました。これも川の傍らに建ってしまして、こういう広場を取って、そしてその柱のところには、神々の像が並んでいるわけです。そういうのがカルナック神殿です。

それからメソポタミア文明というのはご存知のように、チグリス川とユーフラテス川の流域に開けた文明だということですが、その両方の河川の源流はトルコ共和国の中を流れて、シリアやイランに向かっている大きな川です。現在トルコではユーフラテス川の上流にアタチュルク・ダムというでっかいダムを建設中でした。世界で 2 番目だとか 5 番目とか言っていましたが、そういうでかいダムを建設中でありまして、沈没する遺跡の発掘調査に関係者は追われているという状況です。

この夏にトルコのヒッタイトの遺跡を巡る旅に行ってまいりましたが、チグリス河というのは、こちら側から流れていまして、ユーフラテス川もこの辺から（写真 13）こう流れているのがユーフラテス川ですが、トルコのこの辺で今アタチュルクのダムが作られているという事です。トルコのこの川です。この辺から始まってくると回っておりますこの

がクルズウルマック川（写真 14）というトルコで今重要な川で、この川の右岸に、古代ヒッタイトの遺跡がたくさんあるわけで、川の右岸のあちこち歩いてきました。



写真 13

トルコに源流を持つチグリス河とユーフラテス河



写真 14 クルズ・ウルマック川

トルコで今一つ重要な川である。黒海に注いでいる。この川の右岸には、古代ヒッタイト時代の遺跡がたくさんある。首都であったボアズキョイ（ハットーシャ）を始め、宮殿跡、集落跡、墓跡、葬祭殿跡など、なんでもこの川の右岸にある。

首都であった、ボアズキョイ以前はハットーシャと言ったのですが、それをはじめ宮殿の跡、昔集落のあと、それから王様のお墓がずっと並んでいるところ、それから葬儀のためのところ葬祭殿というのだろーと思いましたが、何でもこの川の右岸にあります。クルズウルマック川、その右岸が、古代ヒッタイトの主要な遺跡を持っている。たくさん遺跡を回りまして、発掘担当者に紹介されたりしました。その中にはトルコ人の学者ばかりではなくて、外国人もかなりいました。ドイツ人、イギリス人、フランス人という人たちにも会いました。言葉が通じないのですけれども、何とか話をして、なんとか主な所を聞けたというところですが、日本人の考古学者もおりました。あとでご紹介しますということで、さきにトルコのヒッタイトの遺跡をご紹介します。

まず一つ目は、サリッサ遺跡というところですよ（写真 15）。現在調査中で見学は許されていなかったのです。バラ線が張ってあり、門がしまっておりました。これは困ったと思ったら番人がおまして、私がこんなことをやっていると言ったら、研究者は別だと言って門をあけてもらい見せてもらってきました。日本人は初めてだという話でした。

ここで私が一番興味を持ったのは、基礎の石に穴があいているということです（写真 16）。その穴に鉄の棒を差し込んで、次の石を積み上げる。また次の石にも穴が開いていてそして差し込んであげると言う話を聞いて、これはすごいと思いました。



写真 15



写真 16



写真 17

サリッサ遺跡の入り口です（写真 17）。上の写真が、全部 サリッサ遺跡ですが、これが途切れたあたりに川が流れている。ここにちょっと黒いところがありますけれども、ここが水飲み場になっているということです。回ってみると、宮殿跡などが写真のように見えて、すごく広い所で、どこまで掘ったのかどうかわからないような広さで、こういう遺跡が出ている所だけは、やったのだなあという感じでした。

遺跡の番人をしている人はトルコ人でした。

この旅行で私を案内してくれたフェルファン・オルギルというトルコ人と話をし、私はそのダイジェスト版をフェルファンから日本語版で聴くわけです。そのフェルファンからして、本当のところは分っていないのかもしれませんが、楽しい遺跡の旅でした。

これもサリッサ遺跡です。縦長の写真（写真 16）を見てください。この基礎石にこういうふうにあながあいているわけです。ぽつぽつと。穴の直径がせいぜい 3 c m ぐらい、かなり深いです。人差し指 1 本入るぐらいの穴です。それにまた入るぐらいの鉄の棒を差し込んで、次ぎの石をまた乗っけるという話を聞きました。

ヒッタイトというのは、後からもでてきますけれども、世界で最初に鉄を使っていた人々だと言われております。ところがその鉄をどこでどういうふうに使っていたかというのはまだわかっていないのですが、そういう鉄の棒を差し込んでいた基礎石が並ぶと、すごかったのだなと思いました。空いているところは、入口とかになっております。

いよいよヒッタイトの首都、ボアズキョイ（ハットーシャ）という遺跡にいきます。大神殿と倉庫群が並んでいる下のまち、ここにもヒッタイト・ホールが並んでいます。基礎石の上に。それから、戦車の通り道がありまして、戦いの準備をする場、上の町といいますが、この 2 つに大きく分かれている。

これが下の町の入口（写真 18）です。これが入口です。下は倉庫群、甕にいれまして、食料を倉庫に並べて貯蔵をしていたという話でした。

これは（写真 19）上の町で、続いている坂道ですけれども、向こう側が上の町です。ちょうど一段切れたあたり、これが戦車の走り回る道です。わだちで切れていました道路が、カーブのところなんかは深くえぐられていますから、戦車の車輪が鉄だったのかなという感じはしておりました。向こうから続いてくる。



写真 18



写真 19

一目で見られるような反対側の岩の上に登りまして、写真を撮ったりしました。スフィンクスの門といいますが（写真 20）。あの門が「王の門」と言われています（写真 21）。その辺からも兵隊さんが頑張っていたような彫刻がつけられていて、上の方は戦いの準備をする場所かなという感じがしました。



写真 20



写真 21

これが下の町の全景を見たところです（写真 22）。これが大神殿です。上に登りまして、実際に神像などがあったところがこの辺でした。その周りにあるのが倉庫ですね。上の町は、この道をずっと中に入っていきまして、ここにも、下の町にもこういうヒッタイト・ホールが造られていました（写真 23）。倉庫群なんかには、写真は出ておりませんが、穴の開いた基礎石が並ぶわけです。すごいものだなと思ってきました。



写真 2 2



写真 23



写真 24

ビクカヤという小さな町がありました（写真 24）。神殿と戦車の群があったところでした。ちょうど下の町と上の町との中間にありました。ポアズキョイというのは見て歩くのに一日かかるくらいのまちでした。ここに 2 泊してきました。

それからヤズルカヤというのはヒッタイトの葬祭殿の跡で（写真 2 5 a）、（2 5 b）、（2 5 c）、大きな岩に神々の姿がいっぱい彫刻されている。



写真 2 5 a



写真 25 b



写真 25 c

ここの所（写真 26 a）（写真 26 b）に神像が並んでいて、近づいてみた写真もあるのですけれども、時間の関係もあるので今日はこれだけにしました。



写真 2 6 a



写真 26 b

アラジャホユックという遺跡がこの中にありました。ここは大変重要な遺跡でして、向こうの考古学者たちが注目しているところです。ここから鉄滓が出ているということは、この中のどこかに鉄を作り出していたのだということが分ると思います。その鉄滓が出て、ここの博物館に展示されていました。どこから出たかは書かれていないし、2～3の人に私は聞いたのですがわからないということでした。この遺跡の中に王様のお墓というのがいっぱいあるけれども、そこから鉄剣が出土している（写真 27）。

鉄の剣がさびている。しかも鞘に金が張ってある。だから鉄より金の方が飾りに使われていたのかなという感じもしています。ただこの鉄剣に使われた鉄は、本当にここで作られたものかどうかはまだわからない。

分ろうとすれば簡単に分析すれば分るのでしょうが、そういうことをやる国ではないみたいで、議論ばかり進んでいるみたいですね。どういう議論かということ、それは隕鉄か、人工の鉄かということです。隕鉄というのは隕石でつられた鉄分、それを集めて刀を作ったのではないかという説がまだ根強くあるとのだといいます。それとも人工的に作られた鉄なのかということで、もめている話らしいのですけれども、それも分析すれば分かるのではないかと思います。なかなか難しいらしいです。

それにへんてこな四角な穴もありまして、入る事はできませんでした（写真 28）。



写真 2 7



写真 2 8

アラジャホユックの近くを流れるクルズウルマック川、ここが、向こうがアラジャホユックの入口のところ。すごい城門のようなものが建っているのですが、良く分かりませんでした。それから石垣の積み方が、こういうふうに変わっているのですね。しっかり十字形になる石垣は一つもないというのが、ここの遺跡の特色でした。必らずずらして石を積んでいく事からも分かりました。それから、その下がはっきりしませんけれども、王様のお墓が累々とあるところ。ここから鉄剣が出てきました。四角な穴がこれですが、下りて行けそうだったのですけれども、時間がなかったので行けなかったのでも、アラジャホユックのあちこちをみて歩いて、中には発掘現場に覆屋を架けて、発掘状態のまま見せているところもありました。その辺の壁石などにも彫刻なんかもありましたが、もう少し良い写真を撮ればよかったのですが、そういうのもありました。

カラペテ遺跡、トルコです。クルズウルマック川の支流ですけれども、河岸段丘の上にあります。王様の夏の離宮の跡であると最近の調査でわかったことです。入り口の門の所にある壁石に神像を彫刻して門を飾っていたわけですが、その中の一つに後期ヒッタイトのヒエログリフが刻まれていました。



写真 29

発掘調査の現場を見せてもらって(写真 29)、写真を撮るのに大変でした。向こうは、掘っていけば基礎石にあたるわけ。われわれが雪かきに使うようなでっかいスコップでわさわさと掘っていきます。こんな事で良いのかなと思いつつ見せてもらいましたが、たくさんの方が並んでいて、わさわさと掘っておりまして、すごいところでした。

カラペテの城砦跡は、川に面してこういうふうにならされてた石です(写真 30)。ここを一回りしてきました(写真 31)。これが後期ヒッタイトのヒエログリフが刻まれているのがみえらると思ひます。壁石にはこういうへんてこな人形なんかも入っていました。あとは人の形、兵士の形、神様というのが刻まれていました。こういうのも刻まれていました。鉄器で叩きながら刻んでいったのではないかとおもひますが、そういうのはまだ出ていない。



写真 30



写真 31



写真 32

日本人では大村幸弘先生が、岩手県出身の方ですけれども、そこに入って30年近く調査を続けておられました。「中近東文化センター」というところが、総裁が三笠宮様なのだそうです。そこの主任研究員でおられまして、現在はそこでアナトリア考古研究会、研究所を作って、そこの所長をなさっておられました（写真32）。

ヒッタイトの鉄を探しておられますが、まだまだです。現在カマン・カレホックという遺跡を調査中でした。お会いしてきました。ここはですね、後期ヒッタイトの街並みが、少し見えてきたかなという段階でした。トルコという所はちょっとした丘の上に遺跡が作られているのですけれども、ヒッタイト、あるいはヒッタイトよりも前の断層が同じところに何層にも重なっているのです。ヒッタイトを過ぎて、後期ヒッタイトになっても、それ以降のもの、あるいは、オスマン・トルコの時代あたりから掘り起こさなければいけない状態だそうです。オスマン・トルコのものが出てきたら記録をして、写真をとって記録して、それが終わったらまた掘り起こして行くわけです。セルジューク・トルコなわけです。それもまた写真をとってまた探していく。

そうすると後期ヒッタイトが出てくるわけです。後期ヒッタイトの街並みが今出てきたところだという話なのですが（写真33）、それが終わってからヒッタイト帝国の遺跡が出てくるわけで、先生大丈夫ですかと聞いたのですが、まあ私よりはお若い方で、私より5つほどお若い方だったのですけれども、間に合わないのではないですか、と大笑いをしながら遺跡の中を見せてもらってきました。こういうすごいのが埋まっているカマン・カレホックです。

これが表土です。これから一段掘り下げ、今2段目の所を掘っているところです（写真34）。



写真 33



写真 34

こっちは後期ヒッタイトの道路跡を歩き回って、丸一日見てきました。先生と世間話をしたり、お昼をご馳走になったりしながら、ゆっくりとみて回ってきました。

ヒッタイト帝国というのは、何度も言っていますが、鉄を世界で最初に使った人々の帝国です。古い世紀のB C 16 世紀ごろと言われております。でも先程いいましたように、これまでの調査では、鉄をどこで作っていたかというのはまだわかっておりません。ただ鉄を貯めておいた倉庫群というのはトルコで現在 4 番目の都市といわれるアダナというところがありますが、その近くのキズアトナという古い地名で、キズアトナというところでは鉄の倉庫群があったという事です。これは文献的にも知られていますし、発掘でも出てきているようです。「そこにある鉄は、今は良いのがないよ」という文献もあって、本当でしたら鉄を作り始めるのですが、「待っていてくれ」という文献の記録があるのだそうです。それからどこで作っていたかは別にして、また、季節によって作るときと作られない時があったのではないか、それは季節風だったのか、気温だったのか、その辺も考えながらもやっているよ、という話を聞いてきました。

この夏休み、なかなか良い勉強をしてきたかなと思っております。帰り際に、私は足を捻挫しまして、松葉杖を突きながら帰ってきましたけれども、それでもトルコは暑い所でありました。もう 1 回クルズウルマック川の流域を、ヒッタイトを周りしたいと思います。

それでは日本の遺跡に入ります。前にもお話しましたが、新潟県の青田遺跡というところ。これは、縄文時代の晩期の終末といえますから、八戸市の是川遺跡より新しいのだなというぐらいの時期です。沼がありまして、昔は川が回りこんで出来たところ。沼と川にはさまれたところに掘立柱建物跡がでてきたのです。この集落全景を掘り出すというのではなくて、ここでは高速道路の幅しか掘れないところでした。高速道路は 8 割方出来ておりまして、その遺跡をはさんで、ダンプカーだとかショベルカーが走り回っている状況を 3 回ほど訪ねております。



写真 35

掘立柱建物跡というのは、なんといえますか、こういうふうに建っているのですね（写真 35）。

片方に出っ張っていて、こんな格好をしている。ちょっと特徴的な形で柱がですね残っているわけです。土の中にこういう柱がいっぱい残っている。先程見ていただいた可姆渡遺跡ほどではないのですけれども、そんなに長くはないのですけれども、数量もあれほどではないのですけれども、これだけ土の中に立っているというのは日本の遺跡のなかでも、ちょっとめずらしいのだなと思いました。

掘立柱建物跡というのは、沼がありましてこちらには川が流れていまして、こういうふう
に挟まれた赤いところが掘立て柱だと一応確認されたところです（写真 36）

こっちにも広がりそうですし、こっちにもいきそうですが、高速道路の幅だけしか掘られ
ないものですから、確認はできない。調査中にによきによきと建っていた。あとでご覧に入
れますが、掘立柱建物跡は復元図が出来ておりまして、こういう形の復元でした。二人の先
生に書いてもらって、二人とも高床ではない。平屋で建っているような形で書いておられた。
こんな水辺のところで、高床ではないのかという疑問が一つあります。

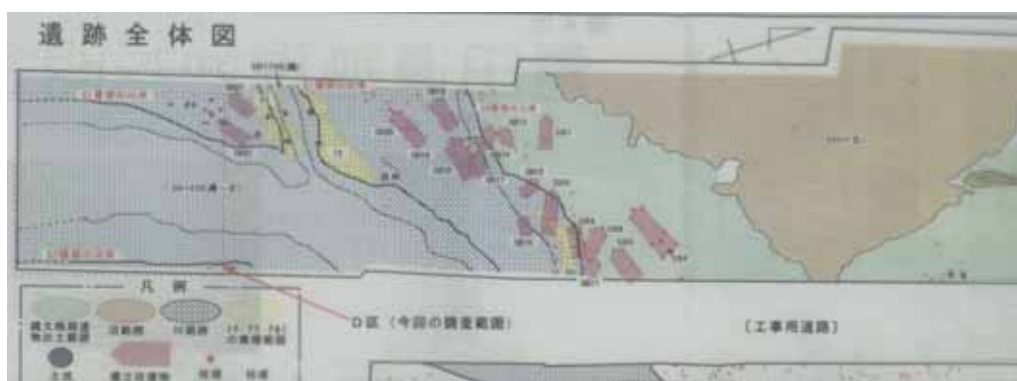


写真 36

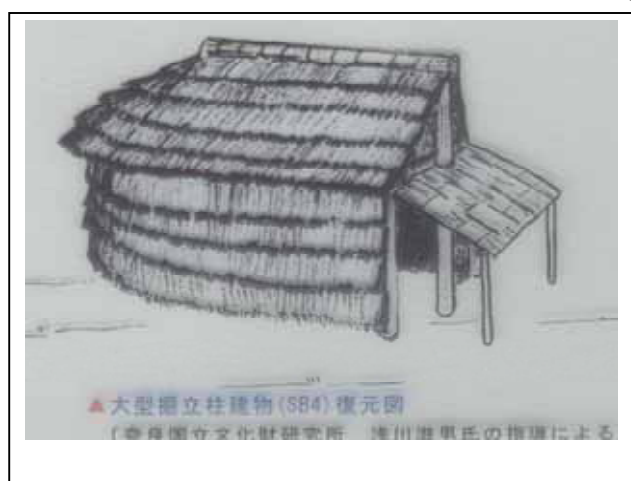


写真 36 b



写真 36 c

また、このところは大きな、ここらこまでですね 6.3 メーターほどあります（写真
37 a）（写真 37 b）。6.3 メーターというと、ちょっと高床で持ち上げて、その間に柱も何
もなくて、というのはちょっと難しいのかなというのが二つ目の疑問としてあったのです。



写真 3 7 a



写真 37 b

こういうのが建っていた。建物跡なんかは、縄文晩期の建物跡とあまり変わりません。とちの実、くりの実、くるみなんというのを水にさらしたような形式がこの中にもたくさん造られて残ってありました。こういう大きな建物跡が建っていたということをみていただいておりますが、こういう姿で建っていたのでそれが先ほどの復元図になるのだよというところです。

私たちは縄文時代の建物跡について遺跡で発掘されたものを復元して、復元したやつにけちをつけるようなことを言

っておりますが、どこまで分っていたのか、という話をちょっと紹介します。

私たちを動かした最初のもは、鹿児島県・指宿市の大園原遺跡から出土した縄文後期の土器片に描かれていた建物らしい絵画でした。高床の建物らしいパース風のスケッチでした。こういうやつです (38 a) (38 b)。指宿市のコープ・はしむれという博物館に行ってみました。こういう土器の形をワッカで作って、この辺にあったよ、というのを貼り付けて展示していました。間口と側面を一緒に書いたような、パース風にしたようなスケッチではないかなと思います。



写真 38 a



写真 38 b

弥生時代になりますと、建物がスケッチされた土器片とか、他の遺物がたくさん有ります。弥生時代に有名な銅鐸なんていう遺物には、建物がきちんとかかれて、これは具体的に3間で高床の倉庫だ、と分かるようなはっきりとした絵画が、描かれているのも定規で書かれたような線で、弥生時代のそういう線というのは、立面図として描かれていた。だいたい真横の立面図であって、パース風の側面も間口も書いているというのは、ちょっとないのです。ですから、追い立てられた獣を書いたのではないかとこということをいっておられた先生も居られたということのをコープ・はしむれ博物館で聞きましてびっくりしたのですが、みなさんいかがでしょうか。これは建物に見えますでしょうか。私は高床の建物をパース風に

描いたのではないかというふうに、今でもそう思っているのですが、これが私たちの縄文時代の建築についての一つの資料でした。



写真 39

もう一つは北海道から出てきまして、八雲町の栄Ⅱ遺跡から出てきた、軽石で作られた建築模型のような壁立式の竪穴建物跡を表した模型だと思っているものです。

こういうものです（写真 39）。軽石で、この部分がここまで屋根、下が壁立てになっていて、ここがちょっと削られているのですが、削られたところが入り口か何かがあったのではないかと私は言ったのですがなかなか信じてもらえないというようなのがありますが、こういうのが出てきております。

やはり縄文人も建築をスケッチしたり、模型を作ってみたしていたのかなと思っていたりしていますが、見る人によってはそうではないよ、という先生方もたくさんおられます。

佐々木：ここで休憩をとります。質問を受けます。5 分ぐらい質問応答を設けております。今までの先生のお話の中で、何か聞きたい事がありましたら、

質問 1： 日本と中国では、人の行き来があったと思うのですが、エジプトやトルコで鉄の技術のほかには、土器は出ていないのですか。

高島： 土器も出ています。有名な土器も出ています。あの辺が土器を作られた最初ではないかといわれております。BC の 18 世紀に、それ時代から作ったのではないかというのです。鉄は BC16 世紀というのですが、その時期ははっきりしていない。話で伝わっているだけなのです。

質問 2： 土器の方が早いのですか

高島： はい、そうです。

質問 3： 最初に 4 大文明が川のそばで出てきたという話はあったが、大体 5000 年くらい前から 7000 年くらい前からという話ですが、なんで、世界同時発生的に出てくるのですが、何故でしょうか。昔から疑問でしようがなかったのですが、先生のお考えを聞きたい。

高島： まだはっきりしませんけれども、本当はもっと古くからあったのだらうと思います。ただ科学がそれほど発達していないというのもありますし、今からだんだん

詰めていけば、もっと上っていくのかなという、早いころ遅いころというのは分ってくるのかなとは思っております。

佐々木：三内丸山遺跡と同じころですね。三内丸山遺跡の話は後半にありますので、

質問 4：ヒッタイトの事です、その金の鞘を持つ鉄剣などは、お祭りだとか戦争だとかに使われたものでしょうか。

高島：王様の墓からでた金の鞘をもつ鉄剣などは、お祭りとかそういうのに使われたのだと思います。でも鉄で鏃とか、刀とかは造っていたし、例のヒッタイト・ホールに差し込む鉄棒も造っていたと思います。彫刻されている兵隊なんかを見ると、そういう刀をさしていますし、弓矢を持っている人もいっぱい居ますから。しかしあれは祭りとか、王様用の特別なものだろうとは思いますが。

質問 5：私は実は行っていますけれども、ここに神殿も水もあったということは分かります。土地土地にあって、部落がっていますね。今は廃墟のようになっていますけれども。やはりそこが水と神殿が重要なものなのでしょうね。

高島：はい、オアシスがあったのです。水の流れが変わればですね、その町はやっていけなくなるわけですから、

質問 6：彼らもやはり人口が増えたのだから、30 人くらいのところから 300 人になると、それでは食っていけないでしょう。
それからもう一つ城の造り方、ボランティアではないけれども実は測量現場からみても、彼らは「人民と神」これを一つの単位として、城を造るのですね。日本は逆ですものね。「我がところだけを守ればいい」ということで、神はどこに居るのか分からなくなるのです。「戦争のときはどのように戦うのか」ということで、こういうふうな大きな根っこがあるのですよね。

高島：そうですね。向こうでは、城壁のなかに人民も兵隊も王様も、みんな入っているのです。ブルグといいまして、ヨーロッパもそうですし、トルコも、中国でもそうした考え方で城が造られています。

佐々木：予定の時間が大きくオーバーしております。私も高島先生が出された写真で、ちょっと説明してほしいのがありますが、ここで休憩に入りたいと思います。始まる時間は後の時計の 4 時 10 分からという事にしたいと思います。それでは 10 分の休憩です。

高嶋：いろいろ言いましたように、あのぐらいの資料しか、建築史家として持っていなかったわけです。縄文時代のものは、スケッチのようなもの、模型のようなものぐ

らいしかなかったのです。

1988 年ですけれども、富山県小矢部市の桜町遺跡というところで、集落の下を流れる小さな川があります。川の中に作られました水晒し場を発掘した。そこからそういうのが出て来た。この調査は国道の金沢に向かう国道だと思いましたが、その拡張工事に先立って行なわれた調査によって出土したものです。1988 年の事ですけれども、1 本の柱がまるまる出てきました。これは縄文時代にはないといわれていた高床の柱ではないかということで、私たち建築史の研究者はワーッと騒いで押しかけました。

掘立柱建物跡に使われていた柱について、地面にどこまで埋まっていたか、また床高さがどの辺からはじまっていたか、壁の高さはどの辺までとか、ちゃんとハカれるような立派な柱が 1 本出てきました。その柱には貫穴が開いていたのです。貫穴というのは少し前の日本の住居には使われていたのですが、柱に穴をあけて通すわけです。

少々強い地震でも大丈夫であったわけです。高床の建物が縄文の後期には北陸にあったという証拠ではないか、といっていたのですけれども、考古学の先生方は 1 本ではどうにもいえないなという感じでした（写真 40）。



写真 40

こういう柱でした（写真 41 a）、（写真 41 b）、（写真 41 c）、（写真 41 d）。

1 本出てきたわけです

ここまで土に埋まっているのです。ここが高床になっているところで、これが貫穴です。貫穴がここにありました。今の貫穴というのはきれいに縦長で 1 対 2 ぐらいのきれいな穴ですけども、そのころは鉄がないものですから、こんな穴をあけていたのだと思います。その上が壁が付いていた溝が掘られていて、こういう押さえ穴も上・下に開いている。こういう柱でした。柱の頂部にも欠きこみもありました。

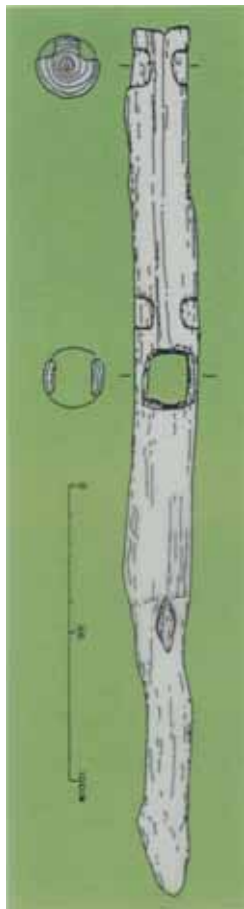


写真 41 a

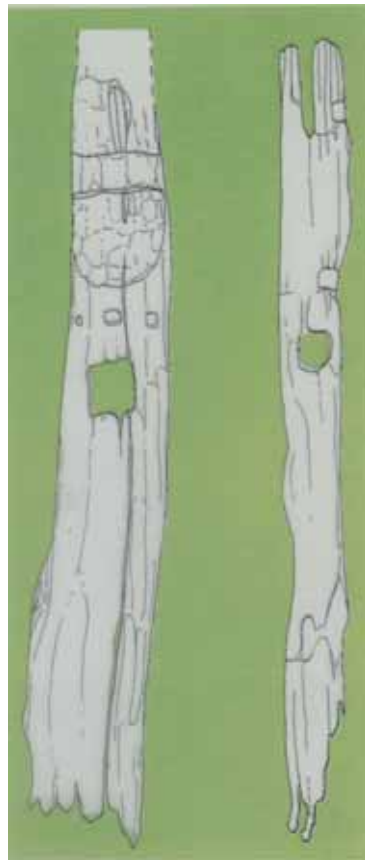


写真 41 b

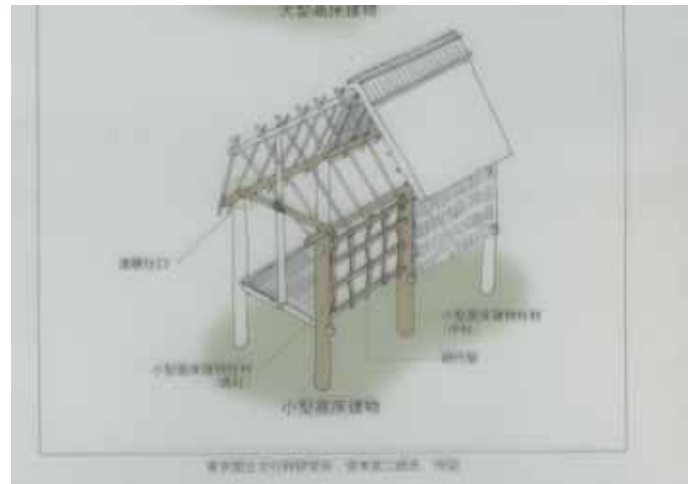


写真 41 c

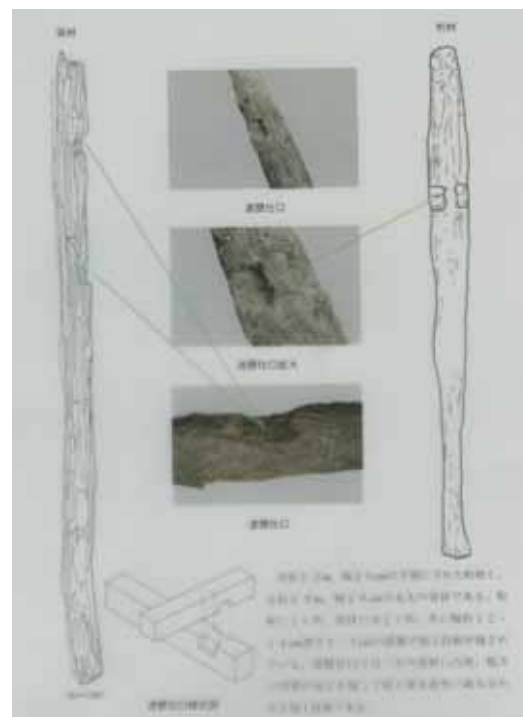


写真 41 d

質問 7： 太さはそれぞれどれくらいですか。

高島 ： 太さは 23 センチぐらい、直径 23 センチぐらいの柱です。

こういう絵を書いた先生もおられました。ここに組む柱だろうということを想定したのですけれども、これ 1 本だけではどうしようもないということで、考古学の人たちはあまり相手にしてもらえなかった。

ところがそれから時間が過ぎまして、1991 年になって、先に柱が出てきたところの少し上流のところを発掘しました。ここと同じ道路の拡張工事で、そうしたらわいわいとそのころの建築部材を転用した材料を使って水晒し場を作っていた。柱が半分削られていたり、梁とか桁も半分削られていたり、割られていたりしたのが今分かったのです。

そのなかで探していきますと、先に出てきた柱と同じ掘立て柱に使われていたろうというもう 1 本の柱が出てきました。また、それよりもさらに大きくて太い柱が出てきました。

桁材に渡顎という仕口が良く使われます。桁があると梁をかけてここを動かさないようにする。渡顎というのはどういうことかと言いますと、桁に梁が、顎を乗つけたようなこういうかっこうでというようなところからついた名前だろうと思いますが、渡顎という仕口が造られた部材でした。それとまたちょうど合うような梁材も出てきました。そのほかいろいろと建築部材が出て来た。これは縄文時代の部材か、ということを言いましたら、縄文の中期後半、後期ぐらいに入るということで話題になりました。

質問 8：青田遺跡と桜町遺跡の時代は。

高島：青田遺跡は晩期の末です。晩期というのは縄文時代の最後で、その前は後期という。後期の前が中期といいます。中期の末から後期に入るのが桜町遺跡です。少しは三内丸山遺跡とだぶっております。

質問 9：なんで掘立てというのですか

高島：掘立柱建物跡はずっと掘立柱です。地面を掘って柱を立てるだけです。それはもう縄文時代前期から造られています。縄文の住宅建設が始まったころには掘立柱建物跡が造られています。

質問 10：青田遺跡みたいなのは平屋建てですか。材木は。

高島：あれは平屋建てです。あそこは不思議だったのですけれども、平屋建てでした。材種は栗です。青田遺跡も、栗がほとんどです。

高島：考古学の先生方だけではなくて
建築史を専攻している先生たちもワープと見に行きました。私も 2～3 回ここには行って、担当者と話をしたり、見たり聞いたりしてきましたが、よく分らないとこ

ろもいっぱいありました。

これが川が流れていたところですよ（写真 42）。今は昔のことです。今はもうこういう感じになっています。

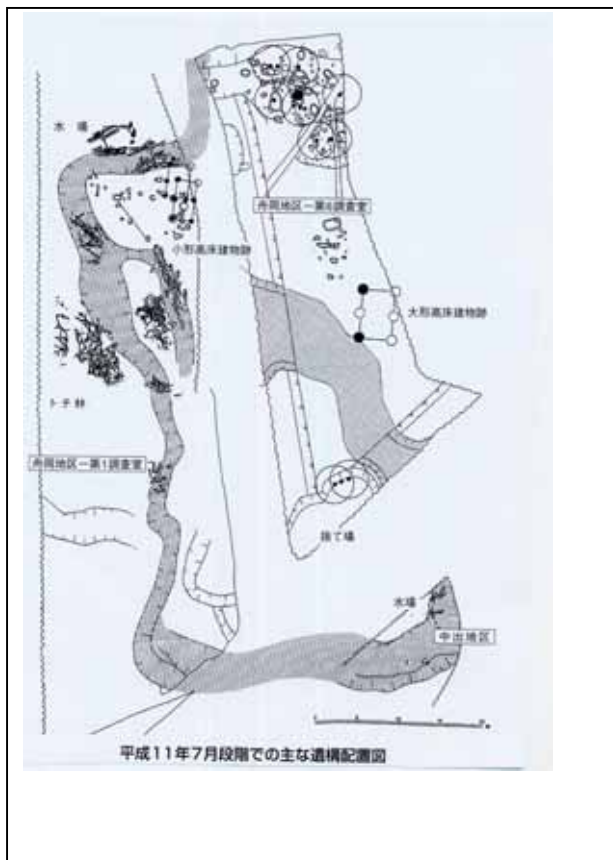


写真 42

先程の写真もこの所に敷地があるものですからワットと言う騒ぎになってあちこちから写真を撮ったりもしてきたわけです（写真 43）。

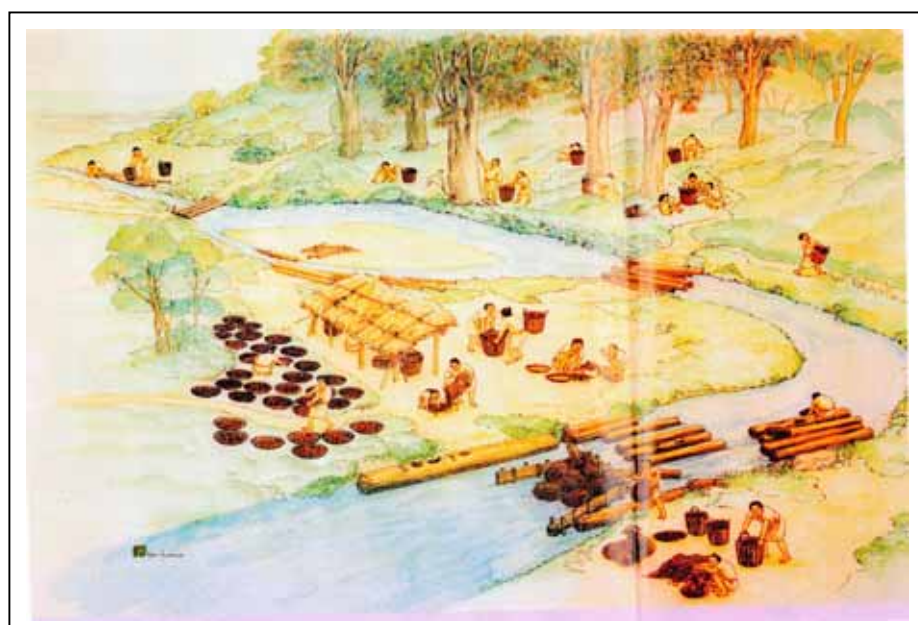


写真 43

こういう絵を書いております現場では。絵描きさんに頼んで復面図というようなものを。

こちらは 1988 年に書かれたほうで、こっちは 1997 年ごろ分った高床の家なんか書いていますが、こういう想定図面を現場ではできておりました。また 1998 年には、もっと範囲が広がりまして、屋根材も出てきましたし、壁の下地材も出てきております。梯子ではないかという材料なんかも出てきました。すごいところでした。

縄文時代の梯子というのはどうだったかというのは、三内丸山遺跡の復元設計の時も一生懸命揉めました。今のような梯子ではなくて、やはり弥生時代の倉庫にかかっていたといわれるようなこう削ってですね、丸太をこう削ってそこに足をかけて登っていくような梯子だったのではないかということですが、これは弥生だろうと、縄文時代はどうだったのだろうと分らなかった。今の梯子のようなやつも作ったのではないかということも考えてはいたのですが、まあはっきりしませんでした。梯子は今日、写真はここには持ってきておりませんが、巧みに太い木をどっと掛けておくと、そこにちょうど良いくらいに穴を開けておりました。こういう上から削って穴をあけてまたそっちにまたあって、そういう順番で、手と足を使えば、上ってゆけるかなと思えるような穴があいていまして、梯子ではなかというようなことを考えた事もございました。

桜町遺跡は当時いろんな新聞社とかテレビが押しかけていろいろな取材がなされていて、騒ぎになったということです。報告書はまだ正式なものは出ていません。建築史の研究者としてもすごく興味をそそられる現場ではありました。2〜3 報告書は出版社の方から出ておりまして、間に行なわれた座談会だとかシンポジウムだとか、そういうのはずっと報告書の形で載ってはいますが、正式な市から出るやつはまだ出ておりません。

いよいよ最後になりますが、青森の三内丸山遺跡のことはお話させていただきたいと思います。皆様よくご存知の遺跡でして、こちらには、あの遺跡復元の時にお世話になった方も見えておりますので、ちょっとお話しづらいこともあります。現在では国の特別史跡指定の遺跡になっております。遺跡の方で言う国宝級の指定を受けました。これはすごい事です。縄文時代の遺跡でこういう指定を受けたのは初めてです。現在着々と整備が進められています。

この三内丸山遺跡が出てきましていと思いますと、すごい事は北海道の修学旅行生が必ずあそこに寄ってくれるようになったということです。それまでは青森ではそれまで見る所がなかったものですから、青森に来てもすぐ弘前だとか十和田湖へ行っていたのですけれども、青森に来てまず三内丸山遺跡を見るというのがコースに入れられております。これはすごい事です。三内丸山遺跡に寄ってから弘前とか十和田湖へ、また八戸に来るグループもあるようですけれども、そういうのが見られるようになったということはすごい発見だったのかなと思います。

三内丸山遺跡のやっている最中です（写真 44）。



写真 44

今日、ちょっと話を早くしようと思ひまして、三内丸山遺跡を調査していて、土木に関することがらと建築に関する事柄だけをちょっとまとめてお話ししようと思ってまいりました。

まず土木に関することがら。北側に、北側というのはこっち側です。

免許センターに下りてくるところの谷の片側に道路が造られたのです。川に下りて行く道路なのですけれども、道路が造られる杭が打たれていまして、ある間隔に打たれていまして、その中にはログハウスのような材料かなと思えるようなやつを半分にしたような形で、グット突き刺さっていた杭も見たりしていたのです。それから道路の側面を化粧するような形で、土器片がきれいに張り付いて、貼り付けられていた。これはすごいなという発見をされています。

それから盛土が、中で3ヶ所造られておりまして、そこが広場のように使われていたかもしれないよという。その盛り土をどこからもってきたかという、堅穴住居を掘ったときの土ではないかというのがそのころ調査をしていた人たちの一般的な意見でした。

それから少しずつ少しずつ、そう深い堅穴はありませんから、せいぜい深くて50～60cmぐらいです。それを掘ってまあ10㎡ぐらいの家が一番多いのですけれども、それぐらいの土を丹念に積み重ねて盛土を作っていて、広場のように使えるようにしたのではないかとということです。

縄文時代の中期後半になりますと、その西側の方に宅地造成がなされておりました。その造成地の崖を埋めながらその上に住宅、いわゆる堅穴住宅が作られていたのもこれはすごい事をやっていたのだなという。そのころあそこの集落も人口が一番増えてきたのかなと思いました。三内丸山の人口が何人あったかという時に、主任の岡田さんは500人はい

たのではないかと言った。それはなぜかと言いますと、竪穴住居の数がすごかった。大きい、小さいのあわせて 800 棟ぐらい出てきた。それは壊れて造り変えられたのもあったでしょうけれども一時期何棟あったかと数えると 100 棟はくだらないだろう。そうすると一家 5 人として 500 人はいるだろうという計算から来ていたのです。

6 本柱もいろいろと話に登りました。

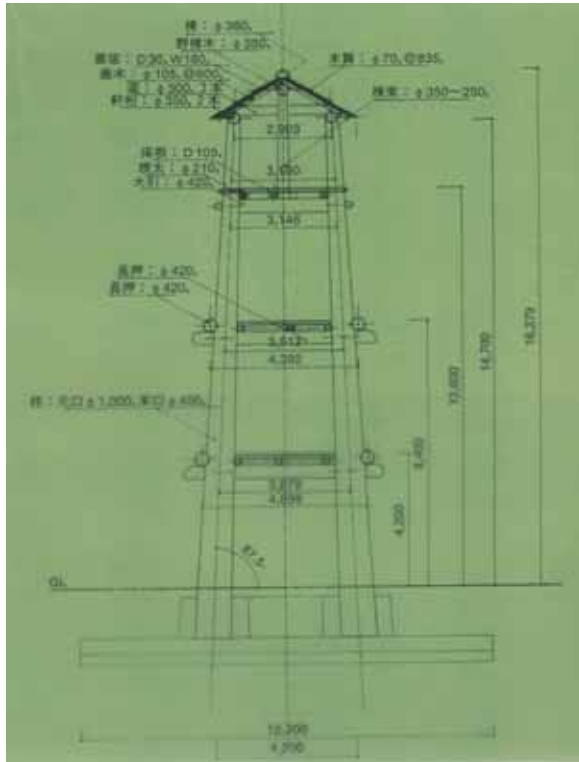


写真 45



写真 46

ここの柱が出てきたから、脚光が見られたかなと思っております。とにかく太い栗の木で、6 本全部というわけではありませんが、一番太いので 130 センチぐらい、一番細いので 85cm ぐらいという栗の木でした。平均 1 m と言っているのですけれども、その柱が立っていたのがどれぐらいの高さだったのか、ということのをいろいろと調べました。その中で土木に関する事で言うならば、土質工学専門で、うちの大学の土木の諸戸先生が現場に来ていただいて、コンサルタントを指導していただきました。発掘の現場に土木の教授が見えて、柱の高さを土質工学的に調査をやっていくことは、日本では初めてのことで、考古学会でも話題をよんだ調査でした。最終的にはこの土質工学の調査結果から、23.0m ぐらいというのが出てきたわけです。

建築の方でもいろいろとやってもらいまして、うちの大学の構造力学の先生なんかに頼んでやってもらいました。滝田先生とか、毛呂先生に頼みましたら、ざっと計算機で 25.0m と言っていましたから、まあ良い線かなと思っていました。それからいろいろ 3 階建てにしようとか、床を張っている所を別に作ろうとか、そうするとだんだん高さが減ってくるわけで、最終的には 16m ちょっという柱の高さになったということです (写真 46)。

床を3ヶ所に張ろうというのも岡田さんたちと相談のうえで決りました。



写真 47

その幅がですね、一枚板に出てきた幅が、4.2mだったのです。

それは6本の柱がこう2本ずつ立っているのですが、縦横とも4.2mというのがちょっと気になる数字だったものですから、4.2mずつ高さを持って行って、その上に16.0mの残りをもうちょっとたして、一番上の床だけは、先程桜町遺跡に出てきたように、貫穴をあけて大引きという部材を通し、根太を乗付けて床を張るということです（写真47）。

大引きを通す貫穴があったということから、ここはそういうふうにしまして、後は外側から長押のようにしまして、長押のようにぐっと締め付けるということでやって、栗の木の重さなんかを計算しまして、造り上げたということです。つるで縛ったりしながらこういうものを建てて行った（写真47）。

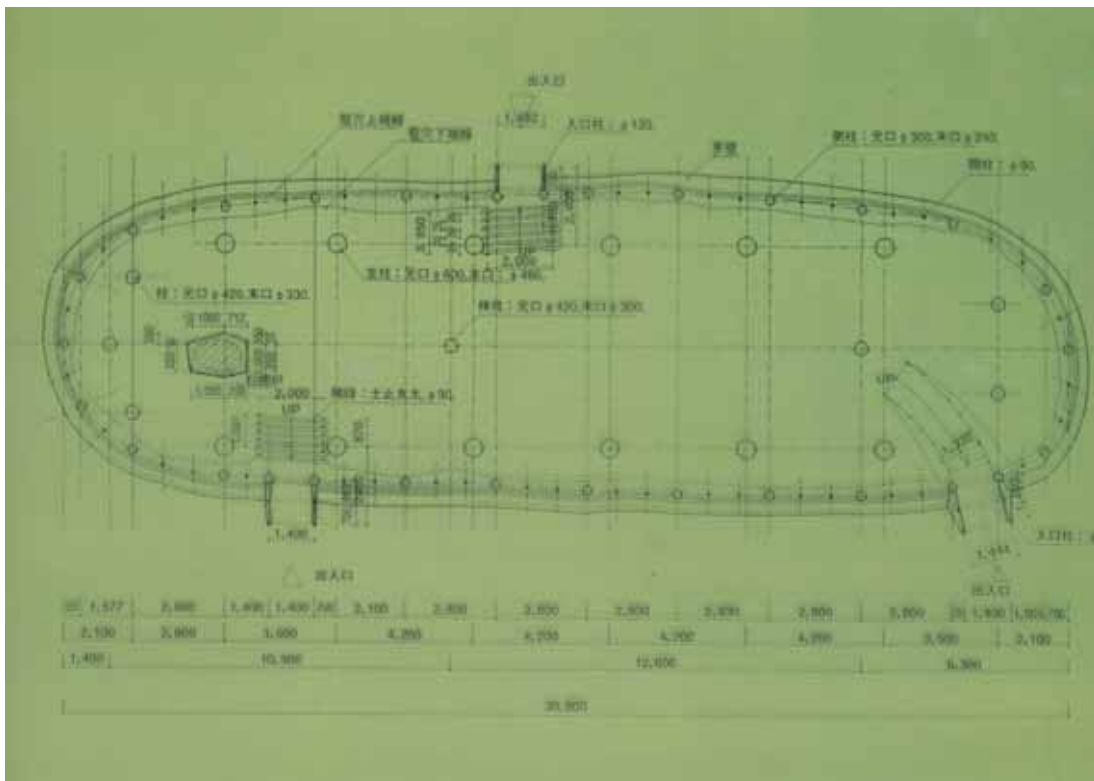


写真 48

それと建築にかかわる私見としましては、大型の堅穴建物、これは日本最大級の建物跡で、長軸が32.0mほどありました。その復元には一人ではちょっと怖いところがありまして、建築設計事務所の方々にもご協力をたくさんいただきました。

高床建物も作るようになったのですけれども、床の高さをどれくらいにするかということで、むこうから来た偉い先生方も低いだとか高いだとか、高床建物をみたことがあるのかと言われました。一般に言われている高床の建物というのは、例えば正倉院の宝庫なんていうのを想定されているわけです先生方は。あの建物は私も見に行きましたけれども、あの床板は、私が全然上を気にしないで歩く事が出来ます。私の身長は 167~168cm ぐらいしかありませんが、全然上を気にしないであの下と平気で歩く事が出来る。そういうことをイメージしておられる先生方がたくさん居られた。でも先程見ていただいた桜町遺跡の貫穴からして、そんなには高くないよ。せいぜい 70cm か 80cm くらいなものだよということで書いておったのですけれども、やあ、後 1.0m 足せということで、つくられたということもありました。

先程の 6 本柱が 4.2 メーターの間隔で並んでいるよということで、そのころからいろいろと調べまして、最後は行き着くところ「縄文尺」という基準尺がどうも縄文時代に使われていたのではないかとということ突き止めた、いまのところ通用しておりますこれは。

縄文尺という 1 尺というかなんというか分かりませんが、その一つの基準は、35.0cm ということに一応決めました。これも人体寸法の一つだとは思いますが、手首を伸ばして、ここからここまで 35cm、30cm というところ曲げてここまでが 30cm、これくらいでできるかということであちこちの遺跡に、図面を取り寄せましてあたってみました。それから三内丸山遺跡の建物も、高床の建物から、大型の建物全部あたってみましたが、大体いけそうです。大型のやつは。

これが大型の竪穴建物（写真 49）、いわゆる壁立式になるものなのですけれども、これで行きますと、この柱までの梁間が 6.3m ということになっていました。

6.3m というのは、35 の 2 倍といえば 70 になる。7×9 は 63 ということで、すごくぴったりの数字ですが、それを脇も。それから壁が立っているものですから、柱と壁までの杭が 1.4m で割り切れていくわけです。そういうふうにして縄文尺というのも一応突き止めたのかな、というふうに思っております。

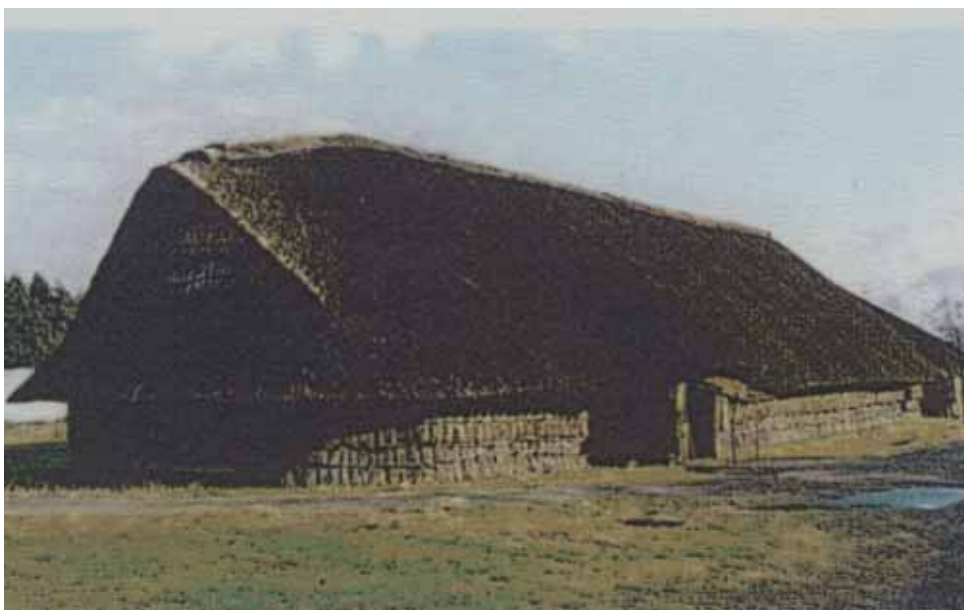


写真 49

この大型の建物（写真 50）では、ちょっと欠陥がございます。検出された出入口というのはこの造っておりますがこの出入口ヶだけなんです、他にもあったろうと思ったのですが、実際現場ではこのかみ合っている大型の竪穴が後 2 つ、こう噛みあっており、どれがどれだか分らなくなっているわけです。

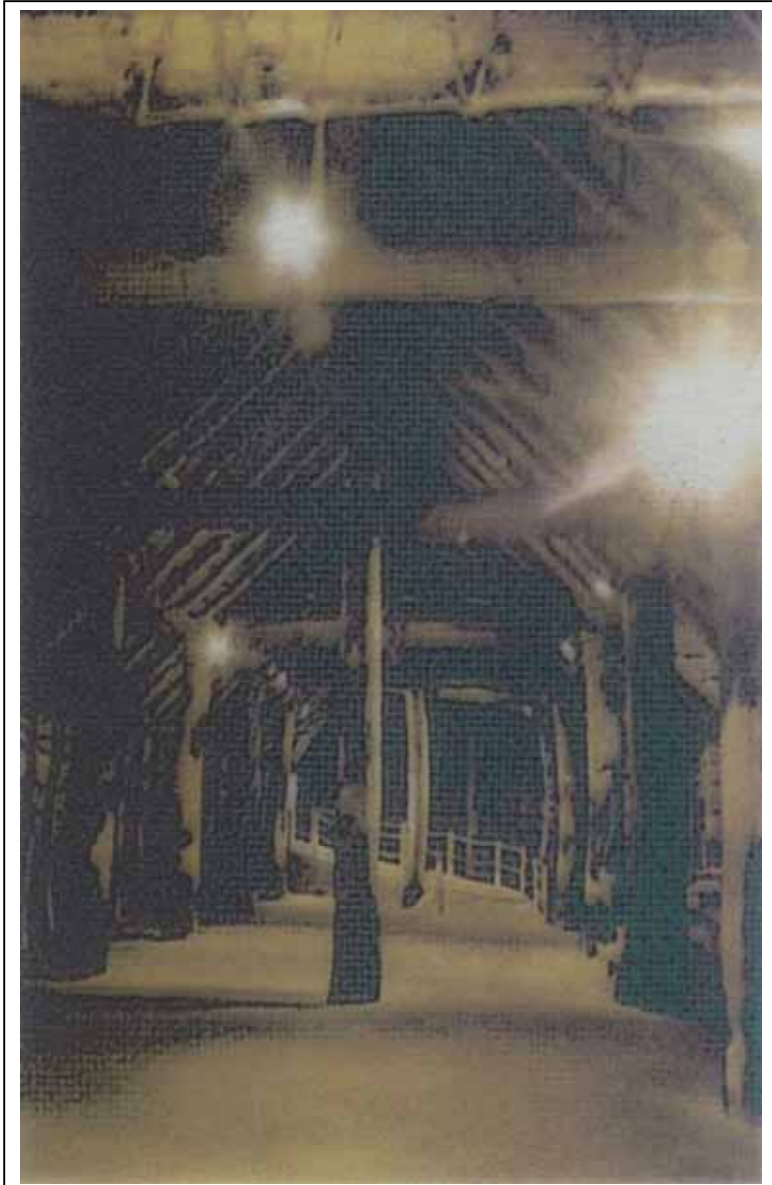


写真 50

これだけは建物の入口だよということで、後の 2 つは皆で相談しながらあとでつけたというのがありました。出入口がもう一つはっきりしなかったということと、ここにすごく大きな石囲炉があります。

これくらいの大きな住居になりますとあと 3 つぐらい炉跡があってもいいですけども、これもこの一つしかこの建物にはあうのがないということになりました。あとは分からないということになりました。炉のほうはこれ 1 つを復元しただけで何とか勘弁してもらおうかということにしました。

梁伏図です（写真 51）。そちらは寄棟のようになっていて、こちらが母屋のようになっていますが、この辺の柱の組み方がちょっと違っていたもので、そういうふうにやってみたというところ。これは誰にも文句は言われませんでした。

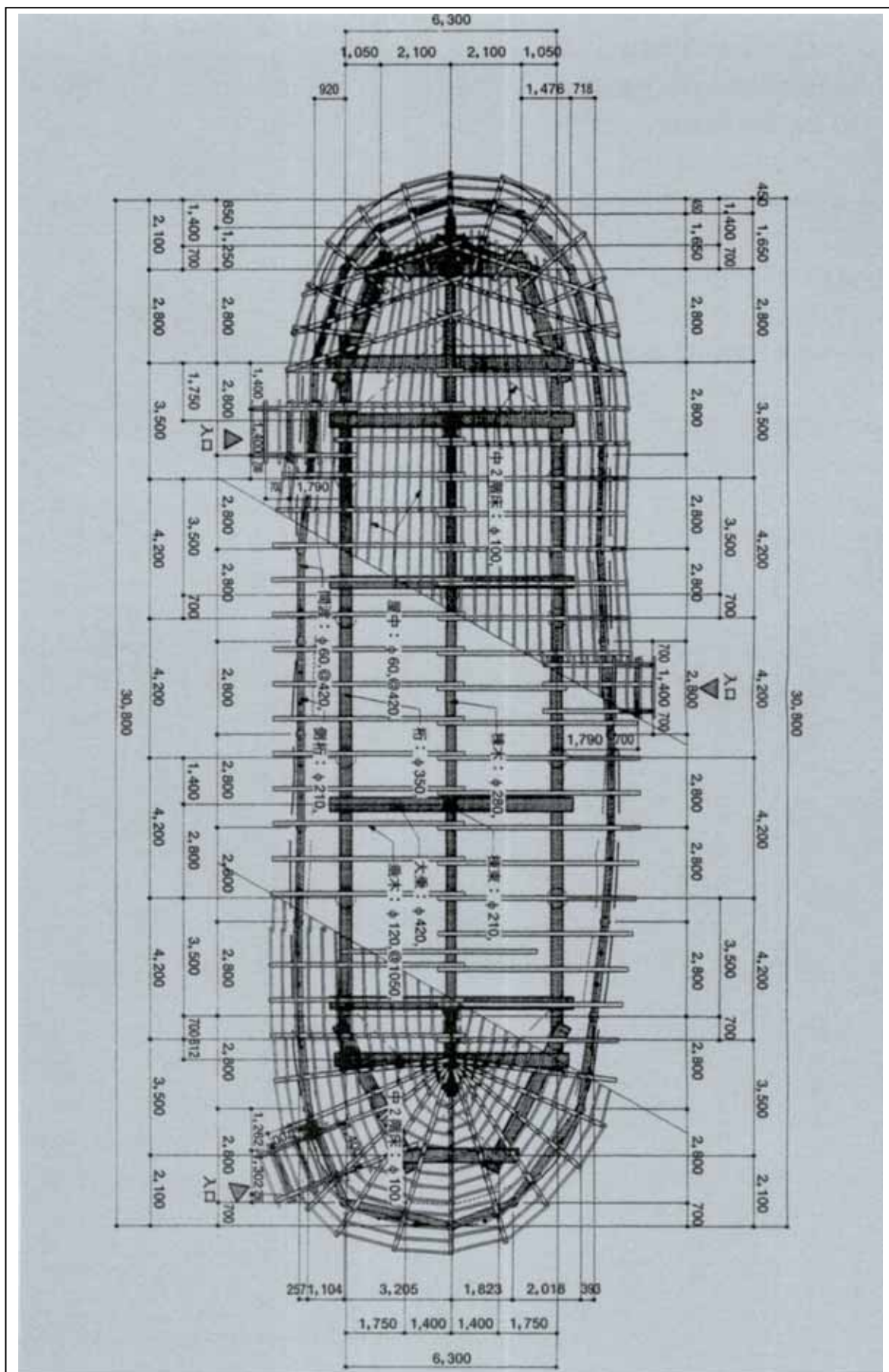


写真 51

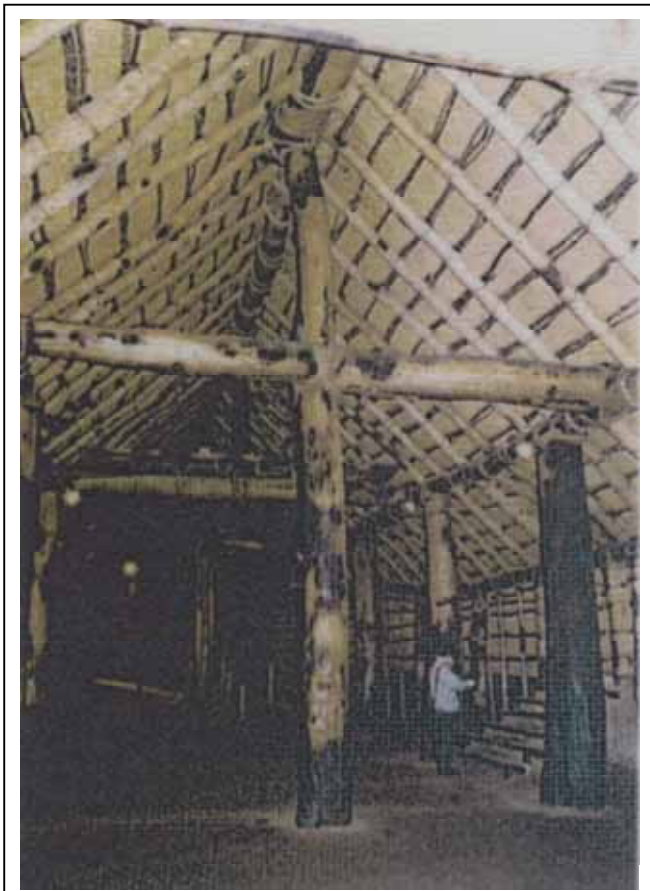


写真 52

入母屋になっていて、こちらは寄せ棟になっているよというというようなどころ。これが内部です。内部の壁の立ち上げよりもまだ下のガーッとこう離れておりまして、掘られているのが大体1.2m前後掘られていたよというのも、それは現場からの報告で大体そのとおりに造ったということで、裏側です。これが裏に設けた入口です。こういうのがありました。これ内部です（写真 52）。

復元してから 5 年ぐらい経った時に、県の方から点検の調査をしてくれということ言われて、見に行ったときの写真の 1 枚です。どこも痛んではいませんでしたが、つるのあたりに虫が入っていたのでしょうか、虫が食ったカスといいたいでしょうか、ズーッと白く出ているのを見て、つるを取り替えてもらえたら良いなということを検査結果として出した事もございます。

川というのは、先程から佐々木先生もいっておられますが、本当に私たちの生活と切っても切れない縁がございます。そこには鮭が上ってきまして、その他の食料も豊富に採れたわけで、縄文時代からという話の場となりましたし、物洗いの場ともなりましたし、交易の船がやってくる、また見張り台が立っている場もありました。それから子どもたちの遊び場でもあった。

川というのは私たちに広くなればなるほど潤う事が出来るのではないかとおもっております。中国の可姆渡遺跡でもそうでしたし、トルコのヒッタイトの数多くの遺跡を見ましても、今見ていただいたように、川と遺跡とは硬く結びついているわけです。特にヒッタイトなんて、鉄を造っていたのはどこか分からないのですが、鉄を造るには「火」と「水」が必要だ。木は山から切ってくることが出来るでしょうけれども、水も必要だということで、水の側にああいう遺跡が次々と建てられていたのだな、と今改めて思ったわけです。それは私たちの生活は、今でも川とは切れないのだということを証明していると思っております。終わります。どうもありがとうございます。

佐々木：ありがとうございました。いままでのお話しの中で、もう少し聞きたいということがありましたら、どうぞ。

最後に、八戸の縄文時代の遺跡についてお話ししましょう。八戸で有名なものは、縄文時代晩期の是川遺跡ですが、是川遺跡は、一王寺遺跡・是川中居遺跡・堀田遺跡の合体した名称でありまして、そこに建つ建物跡やその繋がりや集落跡のことなど、私の分野についてのものは、2～3棟の竪穴建物跡とが発掘されただけで、未だに発掘されていません。

もともと、泉山兄弟が探し出した是川遺跡の遺物そのものは、この遺跡の建物跡や集落跡の形状を探ろうとしてなされたことではなくて、単なる物探しであり、宝物探しの発掘であったのです。建物跡や集落跡を探すには、もっと広い範囲を掘り下げなければなりません。それだけのお金が現在でも出ていないのです。だから小さな範囲でも、出るものがあると、それなりの成果が発表できる発掘ばかり続けているのです。でも是川遺跡に行きますと、そこでの発掘遺物が盛りだくさんに見られ、特に漆を塗った土器や木器など、重要文化財に指定されているものも、非常に多いのです。

そこに竪穴建物跡が2棟展示されていますが、あれは是川遺跡の何処のものでもなくて、その対岸で発掘調査されて得られた風張遺跡（Ⅰ）のものなのです。

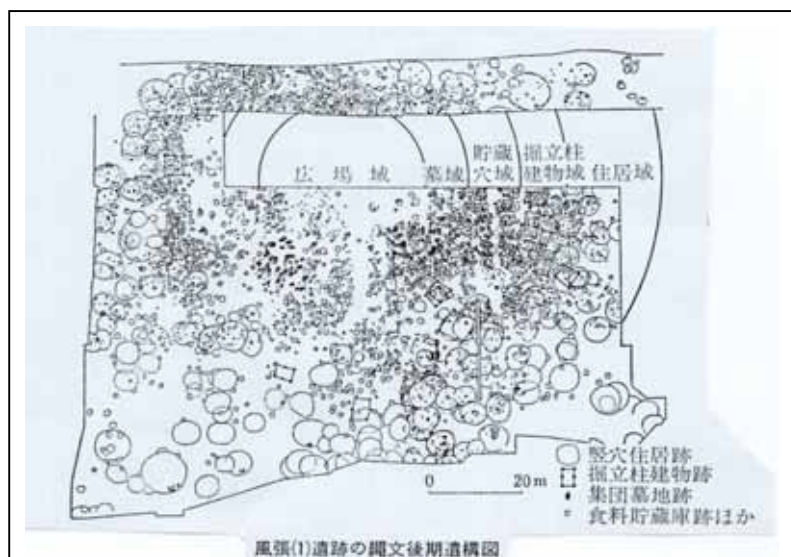


写真 53

風張遺跡（Ⅰ）は、新井田川の右岸に展開する縄文時代後期末ころの集落跡でした（写真 53）。中央に円い広場があり、その周りに墓域が並び、貯蔵穴があり、倉庫と見られる掘立柱建物跡が建ち並び、さらにその外側に竪穴建物跡で住居跡がある、という典型的な縄文時代後期の集落跡でした（写真 53）。

この遺跡から縄文時代の「コメ」が検出されたといって、大騒ぎになったことがありました。ここから出土した土器片に付いていたコメが何処からか土器と一緒に持ち込まれた可能性もありました。

その住居跡は、細い柱を建て並べて壁を造り、内部には基本形としての4本柱を立てて梁桁を架けて屋根を葺くという、壁立式の竪穴建物跡でした。同じ物が2棟、あそこには建てられています。

（写真 54,55,56,57）。



写真 54



写真 55

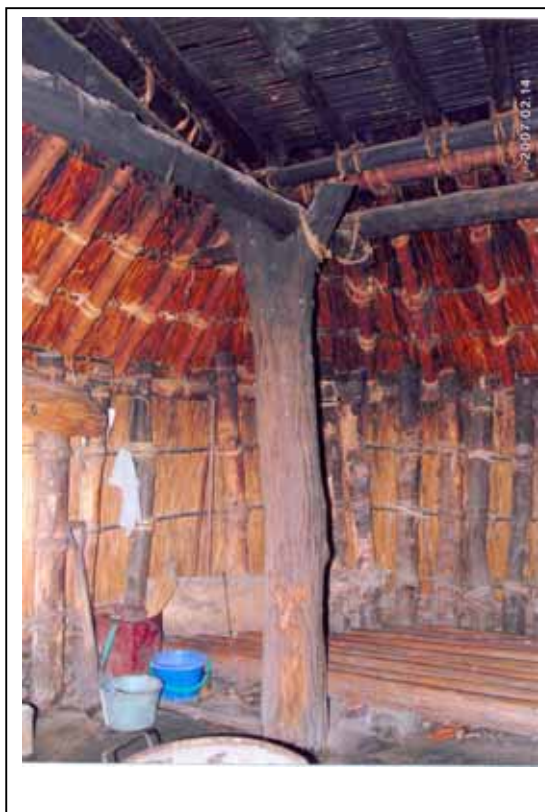


写真 57



写真 56

風張遺跡（I）には、高床式と見られる倉庫跡がいくつも建てられています。その倉庫跡の平面図をみると、六角形になっているのですが、飛び出している柱2本を棟持柱とすると、このような形で決まります。

このような形で建っていたものと見られるのです。(写真 58)

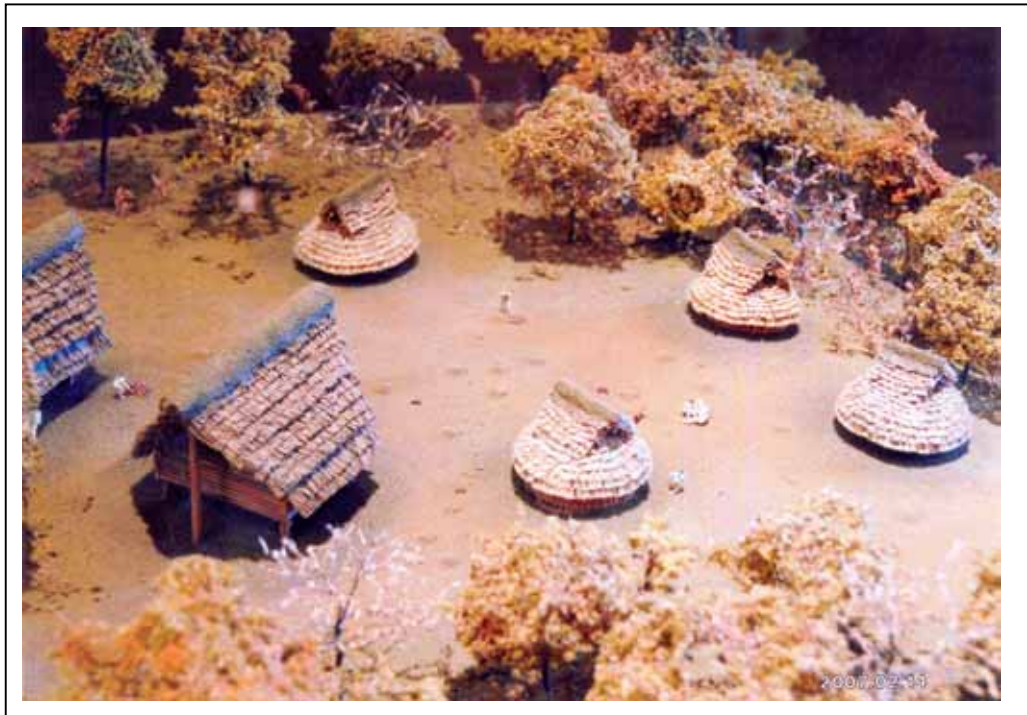


写真 58

風張遺跡（Ⅰ）は一応決着が付いたのですが、是川遺跡はこれからです。新井田川の右岸にあった風張遺跡（Ⅰ）と左岸にある是川遺跡とでは、その有名な度合いからして、断然是川遺跡のほうが上です。八戸市では、是川遺跡のための博物館を建てるようにしているようですが、もっと発掘調査の面積を広げて、建物跡や集落跡などが、皆に分かるようにしてもらいたい、と望んでおります。

佐々木：ありがとうございました。いままでのお話の中で、もう少し聞きたいということがありましたら、どうぞ。

質問 11： 三内丸山遺跡の 6 本柱のことについて、6 本立っていると長いほうの事ですが、チラッと聞いた話に、冬至の時の場と聞いたことがあるのですが、それが本当かどうか。

高島： それはちょっと違います。私もそう話を聞いてはいますが、冬至の祭りの場というのとちょっと違います。冬至の日に行ってみましたが、正確にはそうはなっていない。大体当てはまっているよというのは、真ん中というわけではない。

質問 12： もう一つだいぶ高い木が立っているが、どういう仕掛けでああいうのを立てたのか。

高島： 長野県の諏訪神社で御柱祭りというのがございまして、各神社に各 4 本ずつでっかい木を切って、山から持ってきてするのですけれども、そのやり方を見ます

と、簡単に立てていたのかなと思います。四方八方から縄を引っ張りながら、掛け声をかけながら、もちろん立てるにはコツはいるのですが、倒れないように綱を張りながらですね、声をかけながらやっています。1 本立てるのに一日かけるようなかつこうでやっていますから、まあ立つだろうとは思いますが。

質問 13： 県南地方では馬渕川文化という言い方をしていましたが、新井田川文化とか、馬渕川沿線に集落があって、それからですね、文化という言い方を勝手に付けて良いのかどうかは分かりませんが、川と遺跡の係わり合いという観点からみて、正直に川の恵を、原始時代から受けていると考えてよろしいのでしょうか。

高島： 結構だと思います。どんな遺跡も川の恵を受けていないということはないと思います。私が今日取り上げなかっただけで、どんな遺跡でも川とは深く関わっていたと私自身も思っております。

質問 14： チグリス、ユーフラテス、子どものころに習ったものによりますと、あれが氾濫して、どこからどこまでなのか分らない。毎年来る土砂による農耕という文化が始まったのでしょうか。

高島： そういうのは絶対必要だと思います。ナイル川もそうです。そういうのも含めて文化といえるのではないのでしょうか。

質問 15： トルコの遺跡のところでビックカヤ、ヤズルカヤというが、カヤというのは、どんなところでしょうか。

高島： カヤというのはあるのですよ。またホユックというのもしょっちゅうあちこちに見えるのですね。ホユックというのは丘の上の入口をホユックというが、カヤというのはまた違うような。

質問 16： 今話しになっている縄文の時代というのは、赤茶けた荒地ではなくて、植物がたくさんあったらうし、林もその周辺にあったらうと考えられていますが、よろしいですか。

高島： そのように考えられています。特に三内丸山遺跡の周辺では、植物の調査をする先生がたくさんおられまして、調査をしております。集落の周辺では栗の木がいっぱいあった。それから柱に使うような大きな木が山の方にあったのではないかという結果も出ていますから、大体そういうのもなければ、山に生息する動物もないだらうし、もっと豊かな生活をしていただらうと皆で思っております。

質問 17： 先生の話の中で、掘立柱建物跡、竪穴建物跡。ここの所をもう 1 回すいませんけれども。

高島： 竪穴住居跡というのは地面をズーッと広く掘って、さっきも言いましたが 5～60cm ぐらいの深さに、そこに掘立柱を建てるわけです。一般的なのは 4 本柱です。

それに梁桁を渡して、垂木を外側に回す。大きく掘ったなかに床粘土を張る。カヤとかササとか、最近では土屋根も出ておりますけれども、そういうので屋根を葺いて行くのです。

いま掘立柱建物跡というのは、地面に穴を掘って柱を立てるまでは同じなのですが、柱だけで屋根を支えたり風を防いでいこうというのが掘立柱建物跡なのです。

佐々木： 穴を掘って立てる。柱は。

高島： 柱穴は大きく掘っては、柱のところだけ穴を掘って、掘立柱建物跡を、竪穴は大きく掘る。柱のところだけまた穴を掘ってまた掘立柱を建てて、上の荷重を支えるだけ、壁や柱には取り付けかない、こっちの垂木でも荷重を支えている。掘立柱建物跡は、垂木は屋根だけを構えて、切り屋根になっている。

佐々木： 分ったような、ありがとうございました。

高島： 竪穴というのはずーっと掘るわけです。これが4～5メートル四角に掘ってしまふ。そしてその底に穴を掘って柱を建てて、梁桁を置くわけです。梁に垂木をかけます。これが竪穴式の建物。掘立柱建物跡というのは、地面に穴を掘って柱を立てる。これに梁を渡して、桁を渡して、小屋組みみたいに。そして棟木を置いて、垂木はここまでしかない。柱で壁もここにこう置くわけです。ここまで来るのがあります。入り口だったらこう開けて、これが掘立柱建物跡です。竪穴というのは、ここにも柱が来るはずだと壁が来るのだけれども、三内丸山遺跡のあれみたいに。そうすると屋根はこう切り上がってしまう。壁建て式というのはこれを言う。普通の竪穴というのは、屋根はこっちに建てて、

佐々木： そうするとここだけ見ても分るのですか。

高島： 分らないです。こう押しかけられたところで出てくるかどうかです。この壁面がはっきりしない、とかいうこともあるのですが、高床で迷ったのがいっぱいありました。竪穴建物跡になるのか、それともこっちの方になるのかということで、何回も調査したりですね、調査委員会で何回も議論したりして決めたのがあります。

佐々木： こっちの方の良い所と悪い所というのはあるのですか。

高島： 良いところというのは、良い所か悪い所か分かりませんが、こっちは壁が取り付けかない。壁は取り付けかない柱には。こっちはこれに取り付いてくるのだと、これは現在の建築に直結している。ここが違うくらいで。こっちは屋根がここまで来るとすれば、これは合理的に上から雪が積もったりしても意外ともつのではないかな。ただここに溝を掘ってもらいたい。早い流れがゆっくり流れていくとか、よそから

流れてきたのが、どこかへ流れていくとかの溝を掘ってもらいたいのですけれども、それまで見つからないのです。研究できない例がたくさん有ります。グルーッと溝が回っているのも、たまにはあります。

佐々木： 時間も少し過ぎましたけれども、もう一度、高島先生に拍手で以って、終りとします。どうもありがとうございました。